

何故芝居小屋などという代物に入ったのかはわからないが、芝居を見ていた。

芝居小屋——というのは古臭い表現だが、何か潜んでいそうな薄暗闇や、雑然とした客席、それに随所に滲み出る胡散臭さなどを充分に表現するためには、まさに芝居小屋という言葉を使うより他ないのであった。加えて、中に漂う何処か頹廢的な雰囲気——もはや頹廢的であることもできないほど頹廢しているかのような——も、気取った横文字や形ばかり整った言葉を使うのを躊躇わせる。頹廢という言葉が適当でないなら、疲弊といおうか。役者にしろ、それ以外にしろ、何かしら疲労感のようなものにあふれていた。

しかし私はその様子に対して不快に思うよりはむしろ、一種の安らぎを覚えていた。それは私自身も疲弊していたからに他ならない。あまりに疲弊した人間はもはやただ疲労によつてしか安らぎを得ることはできない。あらゆる活力的なものは逆に倦怠感を増大させるだけであり、自分がいかにそこから遠いかを気付かせるに過ぎない——要するに自分がいかに疲弊しきっているかを自覚させるに過ぎないのだ。

ぼんやりとした意識の中では酒と煙草と汗との匂いが入り混じる空気もそれほど不快には感じなかった。逆にこの弛緩しきった空間に好意さえ私は抱いていた。この芝居小屋には緊張を強いるものは何一つなかった。何処か間延びし、拡散していくような時間の感覚。そう、あの古い阿片窟の図版の中に流れるような時間がここにもまた流れているようであった。時間は非常にゆっくりとしかも不確実に遷移し、少し進んではまた戻るというていた。たらくなので、そのうちに記憶の錯誤まで引き起こしかねない始末であった。

一事が万事そんな風であるから、芝居の筋など見ている間にとうに忘れてしまった。芝居は、延々と同じ場面を繰り返したり、思いついたかのように脈絡のない場面が登場したりと、まるで観客の知能を測っているのかと邪推したくなるような代物である。私は小学生の使うような腰の低い丸椅子に腰を下ろし、漫然とその奇妙な芝居を眺めていた。だが現れる刺激に対して神経は逐一反応ものの、自分が何かを見ているという感覚ではまるでなかった。いわゆる前衛という奴なのかどうかは芝居に疎いのでわからない。ただ、茫漠とした映像が網膜の銀幕を流れるに過ぎなかった。

題名は——なんといったか、覚えていない。聞いた記憶もない。そもそも題名があるの

かどうかも疑わしい。それに題名を知っていたところで芝居の内容を理解できるわけでもあるまい。

役者の演技も今一つぱつとしない。どことなく無気力で、血の通った人間のように見えない。まるで巨大な人形劇であるかのようだ。大人形グラン・ギニョルという語がふいに浮かんだが、この芝居では特に血しぶきがあがるわけでもなく、ある意味、平和と形容しても構わないであろう退屈に満ちていた。

退屈ではあったが、眠くはなかった。それが何故なのかはわかりかねたが、明滅する星をただ何時間も見つめるということがありうるのだから、さして珍しくないことなのであろう。

意識はまるで鋏で留められたかのように固定されていた。そう、既に私の身体というものは眠っていて、意識だけがそこに置いていかれたかのように、明朗な意識だけがそこにおり、ただ芝居を見つめていた。いや、それは芝居なのかどうかさえわからない。もはや動作は意味を持たず、ただ風景が流れるがごとくに役者達は動いていた。

まるで上空から地上を俯瞰するように、ただ人々は動いていた。私はそこに何の意味も見いだせず、ただ頼りなげに見つめているより他なかった。あるいはいつの間にかランダムなパターンからなにがしかの意味をそこに見出すことこそが目的になっているのかもしれないなかった。

……感情は摩耗する。それは間違いのないことだ。なるほど、私は今まさに疲労しきっている。それは認めよう。同時にあらゆる感情は失われかけている。それは既にこの芝居小屋に入る前に失われていたのだ。いつ？ なぜ？ それはわからない。ただ私の頭にあるのは磨り減り使い物にならなくなった剃刀のイメージだけである。ひよっとすると私はそれを思いだしたくないのだろうか。それとも、そもそも理由などなかったのだろうか。しかしまるで胸にぽっかりと穴が空いたかのような空虚感、そこが昔なにがしかの存在で満たされていたことを暗示する。それとも、何か胸を埋めていたものが失われてしまった気がするのはいのせいだろうか。

だけれども一方で、私の胸の風穴は遙か昔からあったような気もまたしている。いつしか小さい穴が私の胸にあって、時と共に少しずつ拡大してきたのだ。鼠の所為か、あるいは風化によるものか、穴はいつのまにか修復不可能なほどに広がり、ドーナツのようにあつけらかんに、冷たい風が中を吹き抜けるのだ。そうして私の身体はいつしか完全に冷え切ってしまったって、硬くこわばってしまったのだろう。私の魂はいつしかその穴からすべて

流れ出してしまったに違いない。あらゆる生命の源とでも言うべき何か、既に私の中から抜け出でてしまったのだ。残るは抜け殻ばかりだ。

そういった、とめどなく流れるとりとめない意識の流れを眺めながら、私はいつしか止まったような時間の中にいた。ただ何もかもが混沌とした意識に現れては消滅し、消滅してはまた現れを繰り返し、無数の色彩が入り混じった雑多な風景が儼のように蠢いては明滅を繰り返した。それは、あるいはばやけたサーカスのパレードを見るようで、曖昧にしか像を結ばぬ何者かが現れてはまた消えていき、私はただ言いしれぬ困惑と、形容しがたいある種懐かしさにも似た感情とを覚えた。

曖昧な感慨を抱いているうちに、その風景を見ているという自覚さえどこかへ行き、あるいは私という視点が消滅し、その幻想の中に呑み込まれた。そこでは何もかもがあり、何もなかった。それらはすべて何かを意味しているようではあったが、それでいて何らかの意味が頭の中で焦点を結ぶことはなかった。

どれくらいの時間が経ったであろうか、変化は急に訪れた。

世界の色が褪せた。花が枯れていくのを早回しで見ると、渦巻く極彩色の世界は見る間に色を失っていった。そうして、見る間にすべてが黒く崩れ落ちていくのであった。剥落する世界の欠片たちは、ただ何もない暗い闇の底へと落ちていった。私はそのとき気付いた。すべてはただ暗闇の中を落ちていくだけなのだ。そして最後には、何もかもが消えてなくなるのだ。

そうしてまたどれほどの時間が経つたろうか。

ふと我に返った——私は依然、暗闇の中にいた。

いつのまにか、誰もいない。気配さえしない。何もない。何も見えない。何も聞えない。完全なる暗闇。ここがあの私が芝居を見ていた芝居小屋であったかさえわからない。音もない。においもない。それどころか、自分がどこにいるかすら定かではない。

ここはどこだ。

わからない。応えるものもない。声すら出ない。肺が土で詰まったかのように、呼吸すらままならない。立っているのか、座っているのか、あるいは倒れているのか。それすらわからない。踏みしめる地面さえない。ひどく、身体が重い。だが、身体を支える何物も、ここには見いだせない。この空間には、何もない。この何もない空間に、私はどうやって

入ってきたのだろうか。

……私。私とは誰なのか。何も思い出せない。いったい私などという人間が存在したという記憶さえない。記憶には、そこにただ空白があるだけで、私という人間の証明すら示してはくれない。

思考の摩耗はいよいよひどくなってきた。身体は冷えていく。心臓の鼓動もまた、ゆっくりと遅くなってゆく。同時に、感じる時間の速度もまた緩やかになっていく。

そしていつしか、完全な沈黙が訪れる。闇の中で時は止まり、あらゆる活動は沈静へ向かう。すべて活動するものはやがてその動きをとめ、闇の中に眠る。

私の思考も、言葉も、あるいは存在さえもが闇の中から生まれ、闇の中に消えていく。観測はなされない。それゆえに、何もかもが、水面上に瞬間現れた波紋であるに過ぎない。かつてあったものがかつてそうあったように戻るに過ぎず、初めに何もなく、そして後にも何も残らない。なるほど、まるで芝居のようだ。一幕の夢のように、ひととき見た熱狂の後にはただ沈黙が横たわるだけなのだ。

ふと、芝居の題を思い出す。思えば、私は確かにそれを知っていた。今この瞬間になるまで、ずっと忘れていたのだ。

……ああ、そうだった。芝居の名は——「闇の中のモノローグ」。

〈了〉